

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：14301
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22510265
 研究課題名（和文） ラオスの伝統文化の保存を通じた在地の農村開発アプローチに関する実践型地域研究
 研究課題名（英文） Practice-oriented Area Study on Alternative Rural Development Approach by Conservation of Traditional and Locally Existing Cultures in Laos
 研究代表者
 矢嶋 吉司 (YAJIMA KICHIJI)
 京都大学・東南アジア研究所・特任研究員
 研究者番号：90444489

研究成果の概要（和文）：

研究者が当事者として関わる実践型地域研究の手法で実施した本研究の当初の目的は、ほぼ達成することができた。さらに、伝統文化の再認識と定住に到る歴史の記録を通して新しい村のよさが再確認される一方、伝統を残す村との交流を望むなど、伝統文化・歴史に関する意識の変化が本研究を通して村人に起きたことは特筆すべき成果である。以上、実践型地域研究が、農村の問題の克服という課題に充分に対応することが提示された。

研究成果の概要（英文）：

We think that desired short-term objectives of this study are nearly achieved by the method of Practice-oriented Area Study. Furthermore, awareness on importance of traditional culture and own history as well as confidence in present village life is gradually developed among the villagers. In this way, Practice-oriented Area Study contributes coping with the issues in the village.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア、援助・地域協力、伝統文化、在地の知恵・技術、集落民俗文化資料館

1. 研究開始当初の背景

研究代表者矢嶋と連携研究者安藤は、JICA(国際協力事業団、現在の国際協力機構)がバングラデシュで実施した研究協力プロジェクト「住民参加型農村開発実験(JSRDE)」(1992-94)と技術協力プロジェクト「住民参加型農村開発(PRDP)」(2000-04)に、当事者として農村開発の実践に参加するとともに、農村住民が主体的に開発プロセスに参画する

新しい農村開発モデルの研究に取り組んできた。これらの成果は「リンクモデル」として現在バングラデシュ政府によって全国展開が図られている。そのプロセスは実践型地域研究のプロトタイプである。

ラオスでも農業・農村開発に関する研究調査に加え、在地の知恵・技術に注目したワークショップを開催した。また、トヨタ財団の助成金(代表者：安藤、2008-2009)を受け、

ラオス国立大学農学部と PADETC (現地 NGO) と協働で集落民俗文化資料館設置による農村コミュニティ振興に取り組んだ。さらに、日本では京都府下の中山間農村調査研究に関わった。

日本の中山間漁村では都市との格差が拡大し、過疎化・高齢化により疲弊、崩壊寸前の危機的状況であった。この状況を招いた一因は、戦後進められた農村開発で、農村社会を軽視しそこに暮らす人々の生活の知恵や技術から開発のヒントを学ぼうとせずに、経済的な豊かさを追求した「過去」の農村開発パラダイムにあったと考えられた。近年、この経験を反省したのであるか、伝統的な道具類を収集展示する文化資料館や集落民俗文化資料館が日本各地でつくられている。農村住民が、自文化を再考し村の生活に自信と主体性を取り戻そうとしているのであろう。

一方、人口の大多数が農村に暮らし農業が主要な産業であるアジアの開発途上国では、発展を目差し多くの農村開発事業が実施された。経済的な豊かさと生活様式の近代化を急進する既存の農村開発パラダイムは、伝統的な生活様式や農法、生活と生業の道具類などを古く遅れたものと見なし「改良」した。それとともに、森林減少や農地荒廃など自然環境の悪化と、農村から都市への人々の移動などが加速された。そして、伝統文化や在地の知識と経験は軽視された。このような伝統の安易な否定が、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」を奪い精神的な結束を弱め、持続可能な発展を阻害した。ラオスやバングラデシュの農村でも、近代化が急速に進められ、日本を後追いつける状況となっている。このままでは日本の中山間農村と同じ問題に直面するのは避けられないと我々は危惧せざるを得なかった。この問題に対処するためには、伝統文化の保存による在地の知恵や技術が育んできた「くらしといのちの豊かさ」の再認識と農村振興を図る「在地」の農村開発アプローチを研究する必要があるとの考えに到った。

2. 研究の目的

既存の農村開発研究の分野では、モニター役として研究者が参加することが一般的な傾向であるが、農村の問題の克服という課題に対して明確な対応は出来ていない。本研究では、我々がバングラデシュの農村開発研究で培ってきた、実践を「客体」としてではなく「主体」として捉える実践型地域研究の手法によって、ラオス農村がやがて直面するであろう深刻な農村問題の軽減を先取りする当事者的研究を、日本とラオスの大学研究者が NGO 関係者や農民との連携協働によって実施する。成果として、アジアの農村の抱える問題の軽減という課題に取り組む新しい地

域研究、開発研究を確立し提案することが長期的な目標であった。

それとともに、伝統文化保存に関する

- (1) データベース作成と道具・技術の公開、
- (2) 教育・人材育成、
- (3) 日本の経験を学ぶ国際ネットワーク育成、を短期で達成する研究目的とした。

3. 研究の方法

実践を「客体」としてではなく「主体」として捉える実践型地域研究を研究方法として採用し、日本とラオスの研究者が、ラオスの NGO と農民の連携協働による農村開発活動に協力参加する当事者的研究を目指した。

ラオスの農村から急速に消えている伝統文化や「在地の知恵・技術」を積極的に再認識・再評価する試みを「農村開発実験」と位置づけ、課題に実践者として研究者が取り組み、「在地の農村開発アプローチ」を実証的に検証した。

課題を以下の三項目にまとめた。

- (1) 伝統文化や歴史の掘り起こしと保存
- (2) 集落民俗博物館を利用した集落活動への参加支援
- (3) 国際草の根ネットワークへの参加

- である。これらは、
- ① 村役会議や村人が出席した寄り合い (PLA:参加型学習行動法)、
 - ② 草分け住民への聞き取り (ラオス国立大学農学部教員及び学生の協力で実施)
 - ③ 伝統的な道具の収集と助言 (農学部教員との協働で実施)、
 - ④ 集落民俗文化資料館の運営への協力、
 - ⑤ 村の行事への参加: 農学部と協働で実施、
 - ⑥ 農学部博物館の運営助言、
 - ⑦ 国際ワークショップへの関係者の参加 (他の研究事業と協力して実施)

などの具体的な手段で実施された。なお、実施における研究者の役割は、調査・活動計画の立案及びその支援、当事者として関わる一方、村人へ必要な助言をすることであった。

4. 研究成果

以下に記述する成果から、当初三項目に分類した本研究の短期目標、(1)データベース作成と道具・技術の公開、(2)教育・人材育成、(3)日本の経験を学ぶ国際ネットワーク育成、はほぼ達成できたと考える。

具体的な短期的成果は、

- (1) 村人による伝統文化と歴史の保存
 - ① 研究実施村 (以後 T 村) の草分け 5 世帯の男女 8 人の個人の聞き取りを基にして T 村の成立史が記録された (ラオ語で終了、日本語翻訳を予定)。
 - ② 村の生活生業の道具が収集され T 村集体民俗文化資料館 (以後集落資料館) に展示保存された (貴重な品々は所有者が各

自保存し、必要時に集落資料館で展示)。

(2) 集落資料館の活用とコミュニティ活動
研究期間中に、T村集落資料館が村の集会場など公民館として定期的に活用された。便所の設置や屋根の修理など建物の維持管理も村によって行なわれている。資料館で村の行事などが開催されるなどコミュニティの活動も目立つようになった。

(3) T村の農学部野外研究村として活用
農学部博物館の教員がT村での実践研究に当事者として関わる中で、T村の行事で農学部学生が伝統舞踊を披露したり運営を手伝ったりした。これまで別々だったT村での農学部各学科の活動の連絡調整が始まり、農学部の研修プログラムも実施されるなど。T村が農学部の野外研究村として役割を果たすことになった。

(4) T村が政府の文化村に制定
T村の伝統文化に関する行事では、当初から郡役所の関係者が必ず招待されるなど行政との連携が図られた。村の振興への貢献が認められ、郡長官から農学部関係者と本研究の研究者に対して感謝状が贈られている。また、T村の活動が認められ、2013年1月10日、政府の文化村に認定された。

(5) 草の根国際ワークショップとネットワークの構築
農学部の教員及び研究者が、日本、バングラデシュ、ミャンマー、ブータンで開催された草の根国際ワークショップに出席し伝統文化保存に関する研究経過の報告とともに、アジアからの参加者との交流を通してネットワーク構築を行った。特に日本の中山間農漁村の直面する課題から参加者が伝統文化の保存を通じた活動の意義を学び理解が深まった、などである。

これらに加え、伝統文化の再認識とT村に定住するまでの各個人の歴史を記録するプロセスを通して新しい村のよさが再確認される一方、伝統を濃く残す村との交流を村人自身が望むなど、伝統文化と歴史に関する意識の変化が確実に始まったことは特筆すべき成果である。そして、最後に、実践型地域研究が農村の課題解決に有効な手法であることを本研究が示したことを成果の一つとしてあげておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 矢嶋 吉司、ラオスにおける村づくり実践研究、ざいちのち、査読有、実践型地域研究 最終報告書、2012、213-230。
- ② YAJIMA K., MUSHIAKE E., ANDO K., Alternative Rural Development

Approach through Reevaluation of Traditional Culture and Knowledge in Laotian Villages - Establishment of the Village Cultural Museum -, Journal of Agroforestry and Environment, 査読有, Vol.5 Special issue, 2011, 95-99.

- ③ 矢嶋吉司、虫明悦生、安藤和雄、ラオスにおける農村文化再評価による新しい農村開発の試み - 集落文化資料館の設立 -、熱帯農業研究、査読無、Vol. 3. Extra Issue 1、2010、131-132.

[学会発表] (計 10 件)

- ① Inthong Somphou, Conservation of Lao Traditional Culture in Thajampa Village, International Workshop on Problems of Leaving from Farming in Villages and Changing Environment & Development in Rural Areas in Bhutan, Japan and Other Asian Countries, Sherubtse College, Bhutan, Sept. 4, 2012.
- ② Kichiji YAJIMA, Community Development through Collaboration with Local Residents, Education, Scholars and Local Government - "Ohkawa Practical Use Project" in Moriyama City, Japan, INTERNATIONAL WORKSHOP ON "SHARING EXPERIENCE OF COPING WITH ENVIRONMENTAL PROBLEM AND SUSTAINABLE DEVELOPMENT", Yangon, Myanmar, Feb. 14, 2012.
- ③ 矢嶋 吉司、ラオス・タチャンパ村での伝統農具資料館活動、阿武町からむらを考え直す公開セミナー、山口県阿武町、2011年8月1日。
- ④ 矢嶋 吉司、ラオス国立大学農学部とタチャンパ村との協働～伝統文化保存をとおして～、文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議、京都府亀岡市、2011年2月27日。
- ⑤ 安藤 和雄、ラオスにおける農村文化再評価による新しい農村開発の試み - 集落文化資料館の設立 -、熱帯農業学会、琉球大学、2010年9月28日。
- ⑥ Kichiji YAJIMA、Alternative Rural Development Approach through Reevaluation of Traditional Culture and Knowledge in Laotian Villages - Establishment of the Village Cultural Museum -, International Workshop of Contemporary Changes in Environment and Development, Bangladesh Agricultural University (BAU), Dec. 13-14th, 2010.

〔図書〕(計 1 件)

- ① 矢嶋 吉司、安藤 和雄 編、ざいちのち、実践型地域研究 最終報告書、2012、京都大学 生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所、292。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢嶋 吉司 (YAJIMA KICHIJI)
京都大学・東南アジア研究所・特任研究員
研究者番号：9 0 4 4 4 4 8 9

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

安藤 和雄 (ANDO KAZUO)
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：2 0 2 8 3 6 5 8